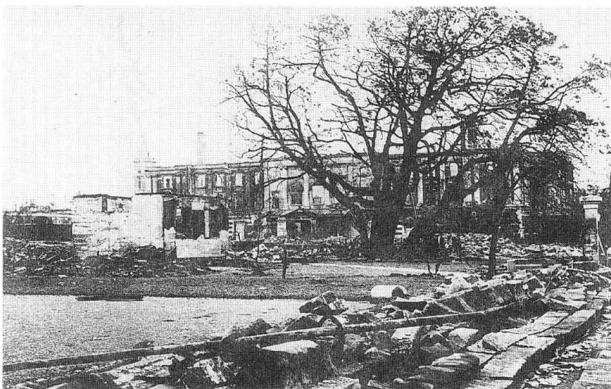
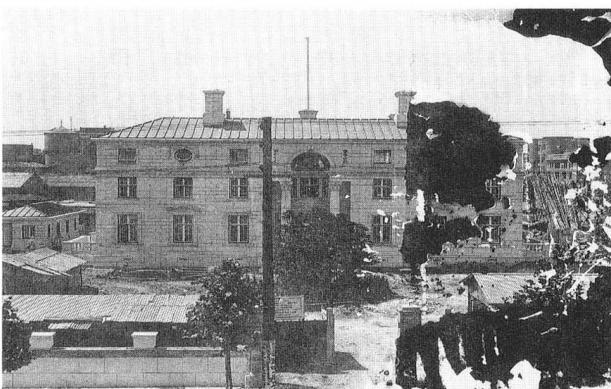




①ペリー提督の横浜上陸。右手の大木が玉楠と伝えられる。



②関東大震災で焼失した玉楠。



③再建された英國領事館正面に移植された玉楠。ペイカーベイツ氏寄贈古写真。黒い部分はネガの破損箇所。

開港のひざば

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS

編集・発行/横浜市総務局横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
発行日/平成3年6月1日
印 刷/有三信印刷所
横浜市広報印刷物登録第030073号 類別・分類G-BE160

横浜の歴史を見つめる 玉楠の記

世に名木や古木は多いけれども、当館中庭に繁る玉楠ほど数奇な運命をたどった木は少ない。江戸時代、この辺りは横浜村のはずれ、西北に延びる砂州の中程、水神の森と呼ばれる土地であった。水神社という小さな祠の背後に玉楠の木があり、近くには一軒の農家があった。この木は開国を求めて来日したアメリカの日本遠征隊、ペリー一行の上陸地点の目印となつた。

開港後、この地は運上所付属の「御用地」となり、船会所や内外人のための貸長屋、役宅などが設けられた。元治元年の「横浜居留地覚書」により、この地域一帯は領事館用地に指定

されるとともに、領事館の敷地と建物を継承してスタートした当館の新館は、玉楠を中心にして計された。それから十年、玉楠の木の高さはいまや新館の屋根を越えようとしている。六十三年には横浜市地域文化財に指定された。

なお、玉楠とはクスノキ科に属するタブの異名である。樹形が丸いからとも、小さい紫黒色の丸い実を付けるからとも、木目の形からともいわれるが、よくわからない。黒潮に洗われる温暖な海岸部に多く生育する。外国との交際の窓口となつた開港の史跡の地にふさわしい。

されるが、実際には慶應二年末の大火後、明治二年中に英國領事館となる。この間、水神社は洲干弁天社へ、さらに羽衣町の嚴島神社に移転する。水神の森は領事館の森と名称を変えて存続するが、老樹としては玉楠を残すのみとなつた。そして大正十二年九月の関東大震災、玉楠も領事館もろとも焼失した(図版②)。ところが、翌年の春、根から新芽が出了のである。領事館の再建工事が進んだ昭和六年にはかなり成長し、新しい建物の正面の位置へ約一〇メートル移植された(図版③)。

昭和五十六年、領事館の敷地と建物を継承してスタートした当館の新館は、玉楠を中心にして計された。それから十年、玉楠の木の高さはいまや新館の屋根を越えようとしている。六十三年には横浜市地域文化財に指定された。

座談

地域博物館のありがたをめぐつて

横浜開港資料館は六月二日で開館満一〇周年を迎えます。これを機会に常設展示の見直しの検討も始めていますが、本日は、類似施設の学芸部門の担当者をお招きし、地域の博物館が果たす役割などをテーマにお話をいただき、参考にさせていただきたいと思います。

お越しいただいたのは、神奈川県立博物館学芸員の横田洋一さんと平塚市博物館学芸員の土井浩さん、それに利用者の立場から、有隣堂の平野実さんに加わっていただきました。

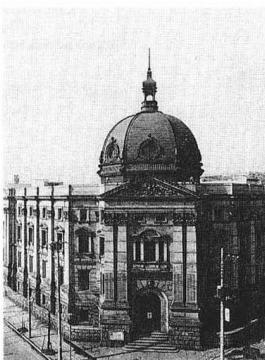
——平塚市博物館の開館はいつでしたか。

土井 昭和四五年に建設準備室ができ、五一年五月に開館しました。昭和四一年に文化センター構想がまとめられ、市役所の裏側の浦賀重工所有地を取得できることもあって、図書館、青少年会館などと共に開設されました。当初は歴史に主体を置いた街道博物館を狙いとしていたのが、資料の制約もあり、総合博物館になりました。

——神奈川県立博物館(県博)は開館してどのくらいたちますか。

横田 昭和四二年三月の開館で、二四年になります。昭和三〇年代から、博物館設立の要求が出されていましたが、

旧横浜正金銀行、現在の東京銀行が移転することになり、文化財的価値のある建物を保存活用するものとして博物館が設立されました。当時は、自然系と人文系を併せた総合博物館という考え方が華やかだった頃で、県博も先進的な博物館とされていましたが、現在ではそれぞれ特徴を持った博物館とうのが主流となり、分離見直しの方向で進められています。



神奈川県立博物館

——平塚市博物館の開館はいつでしたか。

土井 昭和四五年に建設準備室ができ、五一年五月に開館しました。昭和四一年に文化センター構想がまとめられ、市役所の裏側の浦賀重工所有地を取得できることもあって、図書館、青少年会館などと共に開設されました。当初は歴史に主体を置いた街道博物館を狙いとしていたのが、資料の制約もあり、総合博物館になりました。

——神奈川県立博物館(県博)は開館してどのくらいたちますか。

横田 昭和四二年三月の開館で、二四年になります。昭和三〇年代から、博物館設立の要求が出されていましたが、

土井 春と秋に一〇日間、夏休みに一ヶ月位ですか。

横田 人文系と自然系各二回ほどですが、人文系では考古・民俗の分野が常設要素が強いので、歴史・美術のテーマの特別展示が多くなります。

——常設展示の変更是、休館にして行うのですか。

土井 展示ケースから展示内容も全部変えるので、工事期間の三ヶ月は休館します。

——前の展示資料は保存しておくのですか。

土井 博物館資料として使えるものはとておきますが、パネル類は移動博物館で再活用しています。

土井 当館は市域の中心部にあるので、



土井 浩氏

——イギリス領事館の東京移転に伴い、建物の有効活用をはかった当館と、設立の経緯は似ていますね。平塚は、開館して一五年たつということですが、すでに常設展の模様替えをされましたか。

土井 設立当初から常設展示を五年毎に切り替えるという了解があり、市の総合計画に盛り込まれています。

——企画展はどのくらいのペースで開かれていますか。

展を年四回のペースでずっとやっています。県博では、常設展の展示替えはどうしていますか。

横田 全面的な展示替えはやっていませんが、歴史・美術の展示では、保存上の理由から一ヶ月毎に入れ替えを行っています。

平野 常設展示の模様替えについて、いろいろ考えられてることを知ります。横田 言われるとおりで、利用者からは、いつ行っても同じ物しか出でない気がつきませんね。

横田 言われるとおりで、利用者からも、いつ行っても同じ物しか出でない建物を再利用しているので、応用が利かず苦労します。古い建物の保存と新しい博物館の施設は馴染みにくいですね。またスペースの関係で、大きい特別展の時には常設展示がつぶされることがあります。再出発するときには、ジオラマ、模型など移動しにくいものは少なくして、常設展示を変更した時にはイメージを一新できるようにいたします。

平野 「こんなに面白い東京国立博物館」という本がありますが、つまり一般には博物館は面白くないと思われているということでしょうね。常設展示を変更された時にはPRを十分にしていただきたいと思います。

横田 ヨーロッパの美術館や博物館は、いつも行っても同じものがあるのにたくさん的人が入っています。そこに行けば

ばそれが見られるという百科事典的な考え方もあります。名品があるからなのか、目先を変える必要があると思つてるのは我々だけなのでしょうか。

土井 私たちの館では、展示は市民にたいする情報提供と考えていますので、五年も同じものを提供するのはおかしいという考え方です。五年間で調査活動も進むし、蓄積もできますので、それを公開するのだと考えています。また市民の方とともに行った調査活動の成果も、展示に反映させています。

—市民と一緒に調査活動は、市民の側から出てきた要求なのですか。

土井 当初、学芸員の間の討議を経て地域にこだわった活動をする方法として考えされました。それに学芸員が各部門ごとに一人と手薄なので、資料収集、整理、保存に市民の手を借りたいということもありました。

—組織がつくられているのですか。

土井 最初は入門講座が開かれ、その中から定期的に会員制の会を持ち、さらに独自に博物館の中で活動できる研究会組織ができます。そして、研究会になりました。毎週のように調査活動をやり、報告書類もすべて手作りで作りました。そして一〇年たつと一緒に展示をやれるようになりましたし、きっとした論文を書く人もできました。

—研究会組織は、いくつぐらいあるのですか。

土井 現在、サークル活動と呼んでいる組織が六つあります。

横田 年齢が高く、女性が多いですね。なんとか若い層にも広げていく良い方法はないだろうかと考えているのですが。

土井 公民館では、専門の職員がいるわけではなく、その時々に講師を呼んで事業を行いますが、博物館では専門職員が日常業務として、いろいろ情報収集をし、それをフルに利用しています。うちの館では、特別展記念講演会のほかは、外部講師を依頼することはあります。



平塚市博物館の
石仏を調べる会の活動風景

—職員もずいぶん時間を割かれるでしょう。

土井 学芸員の数も少なく、大変です。しかし、展示では不特定多数の人が来館して目にすることができる反面、限られた情報でしかないから、体験学習とか自然観察会など、様々な行事の中でも、展示で示すことのできない情報を提供するいわゆる普及活動が大事だという考えに立って頑張っています。ただ、資料整理の時間が少なくなるのが悩みです。

—県博では、どのような公開・普及活動を行っていますか。

横田 県博の場合も県民が参加できる場として、シリーズの講座、外へ出る自然観察会などの活動を行っています。しかし、参加される方の階層が固定化される傾向があります。

—どういった層ですか。

横田 年齢が高く、女性が多いですね。なんとか若い層にも広げていく良い方法はないだろうかと考えているのですが。横田 市長部局に属していたのが博物館の中の係になっています。

—博物館は、一般的に教育委員会の管轄で、社会教育活動が主体ですが、主事も各区に一人か二人程度いるだけです。平塚では、博物館に専門職員がいて、拠点にもなり、資料もある。参考する人達には理想的ですね。

—博物館は、市長部局の総務局に所属していて、歴史資料を収集・保存し、公開するという考え方でした。その趣旨から言えば、資料閲覧が本来的な業務であり、公開の一方法として展示を行い、派生的に講座があるという位置付けだったのですが、実際には展示が主になってきたています。資料の閲覧についても、博物館と資料館は元々は考え方は違っていたが、機能的には似てきていました。博物館で持っている文献資料の閲覧希望も出てくるでしょうし、東京国立博物館や、アメリカの中から館の活動に積極的に協力してくれる人が出てくるのではないかと考えていましたが、若い人の参加がほとんどなく、結びつきません。ただ、跡調査をしてみると、古文書解説会

の常連の受講者の中には、地元のサークルのリーダーになっている場合が多く、資料館の講座で得たことを地元に近では直接、館がサークルを組織するのではなく、サークルのリーダーたちに情報や資料の提供を行うかたちに落ちています。ところで、平塚は組織的に言うと、教育委員会の所管ですか。

土井

ええ、そうです。市史の編纂部門も当初市長部局に属していたのが博物館の中の係になっています。

—博物館は、一般的に教育委員会の管轄で、社会教育活動が主体ですが、主事も各区に一人か二人程度いるだけです。平塚では、博物館に専門職員がいて、拠点にもなり、資料もある。参考する人達には理想的ですね。

—博物館は、市長部局の総務

それにたいし、当館は市長部局の総務

局に所属していて、歴史資料を収集・

保存し、公開するという考え方でした。

その趣旨から言えば、資料閲覧が本來

的な業務であり、公開の一方法として

展示を行い、派生的に講座があるとい

う位置付けだったのですが、実際には

展示が主になってきたています。資料の

閲覧についても、博物館と資料館は元々

は考え方は違っていたが、機能的には

似てきていました。博物館で持っている

文献資料の閲覧希望も出てくるでしょ

うし、東京国立博物館や、アメリカの

スミソニアン研究所などでは、博物館

の中に資料館を設けています。

横田 新しい県博では、ミュージアム・ライブラリーという考え方を導入しま

これは、実物資料でなく図書資料を見せるのですが、この場合には学芸員と司書との役割分担をしなければならないと思っています。

土井 当館では、実物資料も閲覧できます。閲覧したいという希望が市民から出ればどんな貴重なものでも基本的には閲覧に供しています。これは単に「一度いいから本物を見てみたい」という場合であっても同じことです。

閲覧の担当には、日常的に資料を見ている学芸担当者が当たるのが良いと思います。疑問が出されれば、すぐに答えることができますし、調査部門の人數が多いれば十分対応可能だと思いま



横田 洋一氏

横田 実物資料を見せるときには当然、

については、学芸員の調査研究のためのものという考え方で、公開をしていません。

— 資料閲覧の話が出ていますが、利

用される側から何かご意見がありますか。

平野 利用者は公共の施設を利用しているという意識を持って、自分本位でなくマナーを守らなければいけないと思います。展示場で声を出して説明を読んだり、連れと大声で話したりするような人達と一緒にになると、気が散って困ります。先ほど、常設展示を替えていくのが本来の姿だろうと言うお話をありました。見る側から言えば、魅力のあるのは企画展です。一つのテーマで企画展示が行われる時にそれを見に行く喜びは大きいですよ。手直しされていたとしても常設展に何度も足を運ぶというのは、よほど熱心な利用者でしょう。そこで、企画展を多くの人に知つてもらうために、PRを工夫していただきたいですね。私の仕事である出版で言えば、出版物は一点が新製品で、知つてももらえないけれど買つてもらえるはずがありません。神奈川県内の読書人口、すべての人にこういう本が出たということが伝われば、発行部数も一けた多くなるだろうという夢物語を描いています。特別展についても同じことが言えると思うのです。

物館には、一般図書館と違う収集の方の図書資料がありますから、この閲覧については、専門の司書が当たるのが望ましいだらうということです。

— 資料閲覧のための部屋はあるのですか。

土井 いいえ、学芸員室の片隅で見てもらっています。さきほどの図書資料

良い宣伝方法がみつかりません。博物

館での資料閲覧の話に戻りますが、閲覧の形式としては、古写真、浮世絵など、保存上、現物を公開することに問題

のあるものを複製で提供することも

含みます。つぎに仏像など現物を持つ

ことのないものをデータと画像で提

供する。これは、最近コンピューター

を導入してやるというのが趨勢で、金

沢文庫で実験的に始めましたね。それ

と現物を特別閲覧という形で見せる、

三つに分けられます。

横田 平成六年度の新装開館の時には、今

の三つの閲覧方式が実現予定です。さら

に、県内の博物館への情報提供も

したいと考えています。

— 横浜開港資料館でも将来的には、

図書は原則的に開架で提供し、展示棟

と閲覧室のそれぞれにコンピューター

の端末を置いて、古写真や横浜浮世絵

などの情報を提供したいと考えていま

す。

平野 展示を見に来に来てがっかりするとの一つに、説明に「複製」と書かれていることがあります。われわれが博物館に足を運んで感動する理由は、歴史的な実物に接しているということからで、展示品が複製ということになれば、ますます足を運ばなくなると思うのです。

— 常設展示は複製で、特別展は実物でというのが一つの行き方で、国立歴史民俗博物館はその典型的なものです。常設展示を実物でやるとなると、資料の余地はあるのでしょうかが、なかなか

おっしゃるとおりで、テレビで放送されると入館者数が増えます。改善

はあります。さきほどの図書資料を入

徴するような資料は常時展示したいとすることになれば、やはり複製展示に得ません。

土井 基本的には実物資料を中心に関

示し、他所で所蔵している資料は複製にするというのが平塚の考え方です。

開港資料館では、絶え間なく企画展をやっているので、常設展示が複製でも

企画展の魅力で人をよびるでしょう。

横田 私は専門が美術なので、どうし

ても実物にひかれます。複製でも本物

で見せる二通りの手法があると思いま

す。ただ、どちらかに徹する必要があ

ります。当館は資料館として、文字資

料の収集に重点を置いてるので、資

料からどういう情報引き出すかとい

う問題意識を持って、やってきたつも

りです。

土井 持っている資料によつても違

のではないですか。平塚には、貴重品

扱いするような資料はほとんどありま

せん。マナーの問題では、うちの館で

は無理な面がありますね。年間入館者

平均八万人のうち、約半数が子供たち

ですから。それに日常的に利用できる

博物館施設を持ったのは、ここ二〇年ほどのことですですから。我々の側から、

いかなければならぬでしょ。

からだけですか。

横田 絵画・漆器などは保存上の理由もありますが、仏画などでは、違った展示例を示す狙いもあります。一般的には何も変わってないよう受けとられます。ところで、開港資料館の展示室はとても狭いですね。そのため、展示資料が非常に窮屈に置かれている。もっと数を減らして、離してあればゆつたりと見られるのと見られます。

——資料はたくさん展示してあるのに、見学にいらしたかたからも、これだけで終わしかと言われます。展示スペースの狭さは悩みの種です。一方面積が広ければ、歩くだけでも疲れるということもあるのでしょうか。

横田 見終わつたあと、たくさん見たような、物足りないような、両方の感じを受けます。

——博物館、資料館のいくつもの活動の中で、講座というのは対象者数も限定されますが、消えていってしまうので、効率がいいとはいえないね。展示も対象者は講座よりはるかに多いのですが、図録などに記録しないとやはり消えてしまいます。そこで、情報の記録化ということになりますが、弊害は職員の負担が非常に大きくなるということです。

横田 今言われたような、たくさんの活動を実施しないかなければならないのですが、それには、学芸員の質が維持されなければなりません。そして、学芸員の質を高めるには研究活動が必要ですが、現在は、一般への公開普及

平成3年6月1日(土)

横浜開港資料館館報

(5)

第34号

活動の部分が先行して、職員の質を高めるための研究の時間や予算が遅れています。

——事業を行うための直接的な調査研究と、長い目で見た基礎的な研究も必要です。学芸員が日常的に調査研究活動を行いながら展示を企画・開催し、講座を担当し、さらに出版物の編集・刊行を行っているので、どうしても目の先の事をこなすことに精力をそがれるのが現状です。

横田 各分野ごとに学芸員がいても、すべてをカバーすることはできないので、客員学芸員とか、他機関との連携が必要になります。

——当館では、委託研究という形で各方面の研究者と職員の交流があります。それと、今後展示の面でも、いろいろな交流提携を進めたいとも思っています。前回の特別展示「ドイツ人の見た元禄時代—ケンペル展」は、初めて他館との巡回展の試みをやりました。そこで、県内の類似施設間で提携し、共同展示を巡回するという方法を考えてみても良いのではないでしょうか。

平野 有隣堂では、出版の面において、横浜開港資料館とは着色写真で(『彩色アルバム—明治の日本』)、



平野 実氏

県博とは横浜浮世絵や銅版画で協力させていただきました。最近はメセナという、企業が金を出すが口は出さないというやり方が盛んです。公的機関が私企業と協力するのは良くないという考え方を変えてもいいのではないかと考へています。

土井 最近平塚市域にもいくつも大学が進出してきていますので、それらとの連携の必要も出てくるでしょう。

——当館でも出版物をいろいろ出しますが、宣伝方法のノウハウも無いし、販売ルートも狭いので、苦労してせつなく作っても、多くの人の目に触れないのが残念です。

土井 開港資料館や県博での出版物の売れ行きはどうなのでしょうか。うちでは、ほとんど売れないのですが。

平野 館内だけでなく、どんどん本屋さんに卸したらどうでしょうか。

横田 でけるだけ多くの人に読んでもらいたいので、価格もほとんど利益分を乗せず、実費そのままの価格です。非常に安いと思うのですが、あまり売れませんね。

土井 平塚は、地域に非常にこだわって活動しているので、館活動も地味ですし、出版に限らずPRべたですね。

——高齢化社会の到来とか、余暇活用

の掛け声で、文化施設や、地区センターもたくさんできています。生活と時間に余裕ができ、こうした地域の文化活動に参加される方々に、もう少し自己投資をお願いすることも許されるのでないでしょうか。

横田 各市に博物館があり、それぞれ出版物が出されているので、相互に販売するとか、まとめて手に取れるセンターを作るなどの方法はいかがですか。

——検討すべき課題でしょうね。最後に今後の活動の方向について考えをお聞かせいただけますか。

横田 県博は地域博物館という位置付けではありますが、もう少しテーマを大きく持とうということで、以前からマニ、日本の中の神奈川、世界の中の神奈川という位置付けで考えています。

土井 平塚では、地域博物館の最大の特徴は、講座や普及活動だと考えていますので、これを削って別の方向を考えますからね。

土井 平塚では、地域博物館の最大の特徴は、講座や普及活動だと考えますので、これを削って別の方向を考えることになり、すぐに陳腐化してしまいますからね。

——本日は長時間、貴重なお話をありがとうございました。

(四月二七日横浜開港資料館にて。聞き手は館員の斎藤多喜夫、佐藤孝がたりました。)

資料よもやまばなし

フランス陸軍士官、カミュの葬儀

横浜開港資料館では、今年度最後の企画展示として「横浜の英仏駐屯軍」展（仮称）を予定している。一八六二年九月一四日（文久二・八・二一）、生麦村で薩摩藩主の父、島津久光の一

行の前を横切らうとしたイギリス人グループが藩士に殺傷されるという有名な事件（生麦事件）がおこった。この事件をきっかけとして山手の丘一帯に、翌一八六三年（文久三）から一八七年（明治八）まで、居留民の保護とい

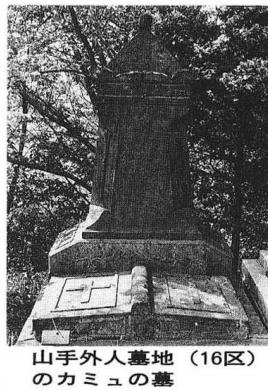
う名目でイギリスとフランスの陸・海

軍が駐屯することになるのである。その数がピークをむかえる一八六四年（元治一）八月頃にはイギリスの陸軍駐屯部隊だけで約一、三〇〇名を数えた（洞富雄著『幕末維新期の外圧と抵抗』）。フランス軍も、イギリス軍ほど的人数は擁しなかったが、谷戸坂一帯に駐屯した。現在、当館では関係資料の収集を進めているが、ここではその中のフランス軍に関する一資料を紹介したい。

一八六三年一〇月一四日（文久三・九・二）、井土ヶ谷村でフランス陸軍士官が攘夷派の浪士に斬殺されるという事件がおきた。犠牲者、カミュ（J. J. Henri Camus）は事件の三か月前の一八六二年七月はじめ、上海からアフ

リカ猟歩兵第三大隊（Bataillon d'infanterie légère d'Afrique）の分遣隊の一員として横浜へやってきたと思われる。

山手の外人墓地にあるカミュの墓には、「享年三〇歳」と刻まれている。



山手外人墓地（16区）のカミュの墓

の外交文書はこの新聞記事を写したものであろう。ここでは基本的に、外交文書の方を訳出し、新聞記事は参考とした。

カミュの葬儀

「一八六三年一〇月一四日に横浜近郊で殺されたアフリカ第三大隊士官、

カミュ中尉の葬儀

一〇月一五日午後三時三〇分になる

と列強各国の海軍及び陸軍のすべての

分遣隊と、横浜の義勇隊（住民から成る民軍）がフランス公使館の中庭とそ

の周囲に集まってきた。司祭たちが公

使の客間のひとつに置かれていた柩（ひつぎ）をとりかこんだ。この部屋

は最初に死体が運ばれてきた場所であ

る。四時にはフランス公使館の部屋は

どこも、あらゆる国の外交官と軍人、

そして横浜の住民とからなる多くの参

列者でいっぱいになつた。各国の外交

団、提督、司令部、海軍及び陸軍の全

将校が正装していた。四時きつかりに

出棺となつた。アフリカ第三大隊指揮官のMeuseau男爵が、カミュの家族の代理となって喪主をつとめた。

出棺の祈りが終わると、葬列は次の

順序で進みはじめた。

まず、葬送の交響曲を聞かせてくれ

るフランスの軍楽隊。

続いて、フランス公使館護衛兵らに

三大隊指揮官。
故人と仲間であった兵士たちにかかる
ラーンス海軍の二人の将校が右側から持
つ柩覆い。

ジヨレス提督、「フランス一筆者註」、
キュー・ペー提督、「イギリス」、フラン
ス公使、外交団、各國列強の海軍及び
陸軍將校の一団、そしてあらゆる国籍
の人々から成る横浜の住民。

葬列は、次のような順序で構成され
た軍隊の長い縦列の真ん中を、パリ外
国宣教会の教会へと進んだ。

一、横浜義勇隊

二、カミュ中尉が属していた中隊

三、各将校に率いられたイギリス陸

軍の分遣隊

四、イギリス海軍陸戦隊の分遣隊

五、オランダ海軍の分遣隊と水夫ら

六、プロシア海軍の分遣隊と水夫ら

七、フランス軍艦セミラミス号とデュ
プレクス号の陸戦隊の諸中隊

カトリック教会は参列者全員を収容す
るにはあまりにも狭すぎたため、各

部隊と義勇隊は長老派の隣の庭に、他

の部隊は近隣の道路に場所をとつた。

セミラミス号の軍樂隊が交響曲を次々

と奏でる中、祈祷が終わり、葬列は先

の順序で墓地へと向かった。

この莊厳な葬列が進む沿道には、多

くの日本人が駆けつけ、終始遠慮がち

なようすであった。その数一、二〇〇

人は下らないこの葬儀の参列者たちが、

あらゆる国籍の人々から成っていることを、彼らの多くは理解したに違いない。そしてすべての居留民と西欧列強の代表者たちが、たったひとつの思いを抱いて、カミュー中尉の遺骸へと集まってきたことをも理解したに違いない。その思いとは、暗殺というやり方に対する静かで、かつ威厳を保った抗議である。暗殺というやり方によって、日本の封建制下の盲目的な階級の一部は、大多数の日本人に対しても面目を失った。暗殺は彼らの悩みの種であった。大多数の日本人は、みんな平和を愛し、勤勉で、かつ野蛮な排他主義よりも進歩を望むという聰明さと機敏さを兼ね備えている。この排他主義を支配階級の一部は、利己心からなんとしても守り通そうとしているのだ。

[中略]

遺体への最後の祈りと祝福が終わると、フランス公使が参列者に向かって自國民にたいして同情の念を示してくれたことへのお礼の言葉を、二言三言述べた。続いて故人の友人であるGordon中尉が、墓穴の前に進み出、アフリカ第三大隊の兵士と将校の名で、カミュー中尉に最後の別れの言葉を述べた。

『みな様、卑劣にも暴殺された友人の最後の、そして実に悲しみに耐えない別れの言葉を述べる前に、実際に惜しむべき彼の勤勉でかつあまりにも短かったその生涯を、少しご披露させていただきたいと思います。

カミュー少尉「少尉説と中尉説がある。以下の文にあるとおり殺害され

た時点では少尉であったが、間もなく中尉に昇進するところであった。事件で昇進が早まったのだろうか? は、ローマ攻略戦で片腕を失った砲兵大佐の子息で、その弟は第四〇連隊の将校として戦列にあり、この兄弟は二人の敬愛する父親と、カミューが日々わたしに語って聞かせてくれたその最愛の母親にとって、自慢の息子たちでした。

一八歳で志願兵となつたカミューは、よく軍務に服し、愛する職業に忠実に仕えたことによつて、すぐに上司の評価を得、五年もたたないうちに、輝かしいイタリア遠征で、少尉に昇進しました。

ソルフェリーノの戦いの際に士官に任命されたカミューは、帰国してから、長い駐屯生活に入りましたが、活動的な性格であつたため、この生活に満足できなくなり、そこで父親に戻地に戻してくれるよう懇願し、中国にいたアフリカ第三大隊に復帰することとなりました。

上海に上陸後、数日して先の困難なコーエンシナ遠征に参加するために再び船上の人となりました。そしてコーエンシナでかれはわたしたちの仲間となり、前の部隊でもそうであつたように、常に愛すべき友人であり、優秀な将校でありました。

コーエンシナで中尉昇進の推薦を受けたこの井戸ケ谷事件に関する論稿では、襲撃されたのは三人という説が一般的である。カミューだけが犠牲となり、あの二人は横浜へ逃げ帰ったというのである。しかし、事件当日にベルクール公使が本省に書き送った報告には、「カミューは午後二時ごろ、ひ

息子たちでした。

親愛なる、今は亡き親友よ、わたしたちの最後の別れの言葉と涙を受けて下さいながら、さようなら、カミュー、さようなら

この最後の別れが終わると、墓穴に向かって軍隊の捧げ銃の礼が横浜義勇隊と故人が属していたアフリカ第三大隊によって行われた。

実に感動的で、そしてあらゆる国籍の人々が参列したことによつて実に莊嚴であったこの葬儀は、集まつたすべての人々の心に深い感銘を残したのです。

井戸ケ谷で襲われたのは、三人であつたか?

明治四一年刊行の『横浜開港五十年史』をはじめとして、これまで発表さ

れてきたこの井戸ケ谷事件に関する論稿では、襲撃されたのは三人という説が一般的である。カミューだけが犠牲となり、あの二人は横浜へ逃げ帰ったというのである。しかし、事件当日にベルクール公使が本省に書き送った報告には、「カミューは午後二時ごろ、ひ

る新たな機会を見つけるかわりに、おそらく戦場での名誉の戦死を遂げるということのかわりに、カミューはも同様の文章がみえ、また幕府の返書にも「貴国人一名遊騎之中」とある

「(統通信全覽)類輯之部 暴行門」(仏國士官カミュス戸ケ谷ニ於テ遭害一件)以下、「遭害一件」とする。やはりこの日、イギリスの代理公使ニルが本省へ書き送った報告にも、「カミューは不幸にもひとりで出かけたので、この野蛮な行為の状況がわかる正確な情報はなにも出てこないので、心配である」との文面がみえる。結局、犯人は逮捕されず、まさにニールの心配どおり、事件の真相はわからず

じまいであった。三人説は「遭害一件」所収の「都築某」が事件一週間後に筆記し幕府に提出した、事件についての「私録」が派出所のようである。ちなみにこの「私録」には事件日などにきらかな誤りがみえる。

それにしても攘夷派の外国人殺傷事件が頻発していたこの頃、駐屯軍の士兵という立場にありながら、丸腰で、しかもひとりで横浜郊外へ散策に出かけるとはまったく無謀な行為だったといえよう。

本文を作成するにあたっては、フランス関係資料の収集に際して中山裕史氏にご協力いただきました。またカミューの墓の調査と写真撮影については山手外人墓地管理事務所のご快諾をいたしました。お札を申し上げます。

本牧の「小野公園」

—小野光景別荘—

はじめに

現在の横浜市中区本牧大里町から本牧元町にかけて、つまり三溪園のとなりの大谷戸から東にかけて、その昔、といつても明治以降の話だが、通称「小野公園」と呼ばれる所があり、市民にも親しまれていたことを記憶している方があるかもしれない。

当時この一帯は、谷戸から房総半島が見渡せる横浜近郊の景勝地の一つであつた。しかし、今は海も埋立られてしまって、昔の面影はない。

土地の人が呼んでいた「小野公園」とは、実は横浜を代表する貿易商で原富太郎と並び称された小野光景の、本牧の別荘地（小野邸）一帶のことである。そこで、本稿ではこの景勝地にあつた「小野公園」の移り変わりを、地図等でおってみることにする。

旗本領から代官領へ

最初に紹介するのは、佐藤安弘氏から当館へ寄贈された、江戸時代末の絵地図である。添付された資料によると、これは、元禄一二年四月から旗本藤本主計の知行所であった武藏国久良岐郡本牧本郷村が、安政六年二月に代官領へ

に上知された際、名主佐藤次郎左衛門らが代官の小林謙助に差出した絵地図の控えと考えられる（地図①）。この地図を見ると、後の「小野公園」一帯は山林が主であった。御陣屋跡が西に、東には山王社、さらに八王子社がある。『横浜市史稿・地理編』によると、本郷村は石高八〇八石七斗一升七合で、その内三二七石六斗二升二合三勺が大久保大隅守に、三九八石三斗五升八合五勺が藤本筑後守に、七〇石七斗三升六合二勺が松浦造酒丞に、一二石が十天社に給付され、その子孫の知行所となっていたという。

この旗本領は、その後横浜開港に備え安政六年に代官領に、慶応元年神奈川奉行預所に（『横浜沿革誌』）、明治維新以降は神奈川県管轄にという経緯をたどり、明治二二年の市制町村制施行で本牧村大字本牧本郷となった。そして、明治三四四年四月一日、横浜市へ編入され本牧町と改称されたが、昭和八年四月一日には廃町、小港町・本牧和田・本牧三之谷等の各町が新設された。『小野公園』一帯は、本牧元町（牛込・八王子・八王子の奥の一部）、本牧大里町（下里・大谷戸）となつて現在にいたっている（『横浜・中区史』）。

に上知された際、名主佐藤次郎左衛門らが代官の小林謙助に差出した絵地図の控えと考えられる（地図①）。この地図を見ると、後の「小野公園」一帯は山林が主であった。御陣屋跡が西に、東には山王社、さらに八王子社がある。『横浜市史稿・地理編』によると、本郷村は石高八〇八石七斗一升七合で、その内三二七石六斗二升二合三勺が大久保大隅守に、三九八石三斗五升八合五勺が藤本筑後守に、七〇石七斗三升六合二勺が松浦造酒丞に、一二石が十天社に給付され、その子孫の知行所となっていたという。

この旗本領は、その後横浜開港に備え安政六年に代官領に、慶応元年神奈川奉行預所に（『横浜沿革誌』）、明治維新以降は神奈川県管轄にという経緯をたどり、明治二二年の市制町村制施行で本牧村大字本牧本郷となった。そして、明治三四四年四月一日、横浜市へ編入され本牧町と改称されたが、昭和八年四月一日には廃町、小港町・本牧和田・本牧三之谷等の各町が新設された。『小野公園』一帯は、本牧元町（牛込・八王子・八王子の奥の一部）、本牧大里町（下里・大谷戸）となつて現在にいたっている（『横浜・中区史』）。

本牧の小野家所有地

次に、明治一四年一月に内務省地理局測量課から出された『横浜実測図』（五千分の一）の本牧本郷村（地図②）を見てみよう。「小野公園」一帯は畠と山林になっている。いつ頃、小野光景が畠と山林からなるこの本牧の土地を購入し、その一角に邸宅を建てたかは不明であるが、海水をひいたプールまで造り、コンクリートの護岸は恰好の魚釣り場であったというから、「小野公園」が三溪園とならんで本牧の名所となつていたことは間違いない。

ところで、原富太郎は外国からの使者をしばしば三溪園に招待したことでも知られるが、小野光景邸もまた同様であった。明治四年一〇月一九日の『横浜貿易新報』（三面）は、横浜商業会議所が一八日、米国の実業家団体一行の歓迎園遊会を、本牧町大谷戸小野光景会頭別邸で開催したという記事を載せている。横浜・東京の商業会議所役員やドーラマン委員長以下四〇余名等、百人を超える人々が集まつたという。では、小野光景あるいは小野家が本牧に所有していた土地は、正確にはどのあたりであろうか。それは、昭和五年三月に発行された横浜土地協会編『横浜市土地宝典』第一巻中区之部の本牧町の地図で確認される。

ここでは、「小野公園」があつた本牧町字八王子奥・大谷戸の部分のみを紹介しておこう（地図③）。

小野光景は大正八年九月一八日に死去しているから、これらの土地は家督を相続した光景の三男小野哲郎の土地



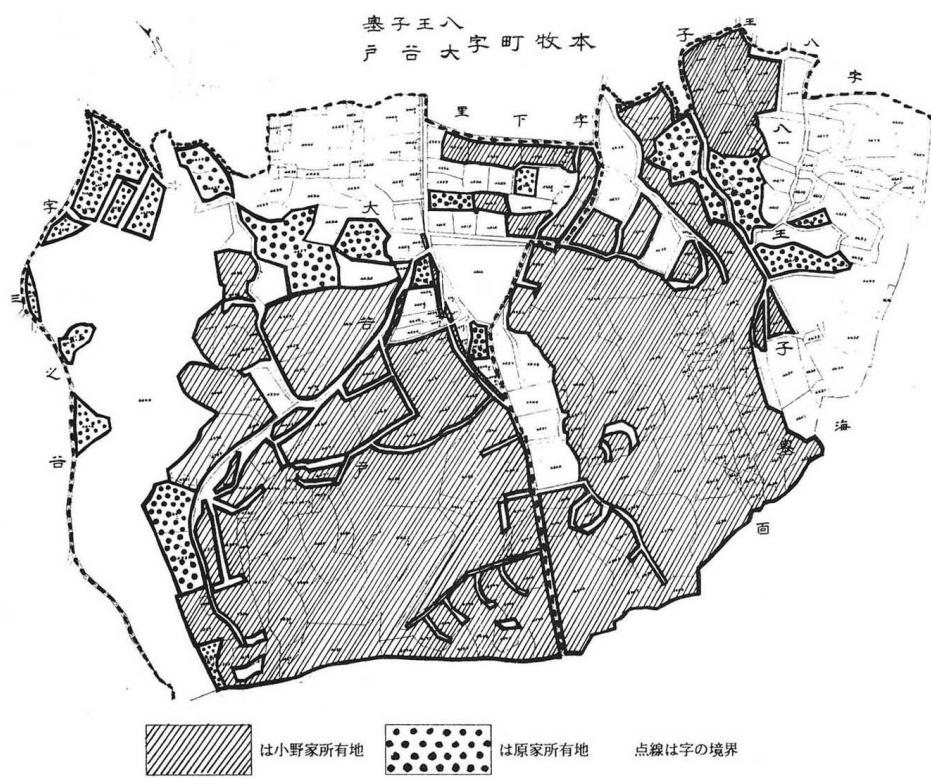
地図①

として記載されている。
三之谷（三溪園一帯）の原富太郎所
有地は、その広さにおいて想像を絶す
ものがあるが、小野光景の所有地も
また同様であった。表は、「横浜市土

地宝典」から土地の集計をしたもので
あるが、これによると、大谷戸と八王
子奥の小野家の土地は約二万六千坪に
もあり、やはり山林が多い。海が見渡
せる小高い丘は、横浜の豪商小野光景



地図②



地図③

本牧町字大谷戸・八王子奥の土地集計

【大谷戸】

種別(単位) 所有者	田 畝.歩	畠 畝.歩	山 畝.歩	宅地 畝.歩(坪)	合計 畝.歩(坪)
小野哲郎	17.10	165.06	293.19	34.12 (1,032)	510.17 (15,317)
小野哲郎他1名	—	1.29	—	.02 (2)	2.01 (61)
原富太郎	3.00	7.05	308.04	43.18 (1,308)	361.27 (10,857)
原善一郎	3.10	—	—	— (—)	3.10 (100)
その他	23.26	46.04	34.22	24.03 (723)	128.25 (3,865)
合 計	47.16	220.14	636.15	102.05 (3,065)	1,006.20 (30,200)

【八王子奥】

種別(単位) 所有者	田 畝.歩	畠 畝.歩	山 畝.歩	宅地 畝.歩(坪)	合計 畝.歩(坪)
小野哲郎	—	86.13	270.01	10.20 (320)	367.04 (11,014)
小野哲郎他1名	—	—	—	— (—)	— (—)
原富太郎	—	—	—	— (—)	— (—)
原善一郎	—	14.18	15.27	— (—)	30.15 (915)
その他	—	96.26	35.06	44.03 (1,323)	176.05 (5,285)
合 計	—	197.27	321.04	54.23 (1,643)	573.24 (17,214)

注)「山」は僅少の「原野芝地」を含む。

の別荘にふさわしい所であったといえよう。

安達謙蔵と八聖殿

その後、「小野公園」の一部は第二次若槻次郎内閣の内務大臣等をつとめた安達謙蔵に譲渡された。そこで、

本牧で八聖殿の開殿式を挙行した。八聖殿は、ソクラテス・キリスト・釈迦・孔子・聖徳太子・空海・親鸞・日蓮の八聖像を安置した、修養道場のようなものであったが、建設には一五万円か

その経緯について簡単にふれておく。昭和八年一〇月一三日、安達謙蔵は本牧で八聖殿の開殿式を挙行した。八聖殿は、ソクラテス・キリスト・釈迦・孔子・聖徳太子・空海・親鸞・日蓮の八聖像を安置した、修養道場のよう

な別荘にふさわしい所であったといえよう。

「安達君が、最近横浜の本牧へ別荘を造ることになったので、横浜人士の喜び方は大したものだ。真逆か別荘一つの関係で、震災の借金を、棒引にして呉れいでもあるまいが、兎に角夫れを非常な光栄として居る。所で夫れについて茲に一つの美談がある。夫れは其別荘の敷地が小野哲郎さんの所有にかかる本牧八王子鼻の旧フランス陣屋のあった所で、敷地にすれば二千坪そこくのものであるが、そこを別荘地として周旋したのは、誰あらう内相直参の戸井嘉作代議士だと云ふことだ。

『河西豊太郎』でも、次のように証言している。安達・河西・戸井は八聖殿の建設候補地を探しまわり、杉田の梅林の料亭で話合い、眼下に海を望んだ本牧の景勝地を選んだ。その後の協議には、小泉又次郎も加わっている。当初六〇〇坪を予定し、坪五円、計三千円ということであったが、敷地はその後増加し、千何百坪となつた。安達には金がないので、河西が用意した。伝記に一万五千坪との表記もあるが、確かな土地面積は不明である。

また、『蚕糸經濟』昭和六年一二月一〇号(第三卷第二十七号)には、次のようなエピソードが載っている。

「安達君が、最近横浜の本牧へ別荘を造ることになったので、横浜人士の喜び方は大したものだ。真逆か別荘一つの関係で、震災の借金を、棒引にして呉れいでもあるまいが、兎に角夫れを非常な光栄として居る。所で夫れについて茲に一つの美談がある。夫れは其別荘の敷地が小野哲郎さんの所有にかかる本牧八王子鼻の旧フランス陣屋のあった所で、敷地にすれば二千坪そこくのものであるが、そこを別荘地として周旋したのは、誰あらう内相直参の戸井嘉作代議士だと云ふことだ。

さいごに

この八聖殿は、昭和二二年市に寄贈され、一八年にはその周囲が八聖殿公園となった。また戦時下本牧海岸一帯は要塞地となり、小野邸の台地等には対航空機用の高射砲陣地が設置された。防空防護施設としての役割を与えられたのである。その後の変遷は省略するが、現在「小野公園」一帯は、八

聖殿や本牧臨海公園として市民に親しまれ、また一部は法務省横浜入国者収容所に、あるいは住宅地に様変わりしている。小野光景の面影は、三渓園とは違った形で、横浜市に色濃く残っているといえる。



三月某日、市内神奈川区にお住いの河合由美さんが、当館で企画展「横浜新聞と雑誌」を開催中のことを知り、いくつかセピアに変色した古写真をお持ち下さった。そのなかの一枚が左に掲げる写真、のち当館にご寄贈いただいた。屋上の看板は「毎日電報社横浜支局」、軒燈には微かに「住吉町五ノ七二(カ)」とある。「毎日電報」は、大阪毎日新聞社の本山彦一が東京進出の橋頭堡として、「電報新聞」を明治三九年一二月に買収して改題、同四四年三月に「東京日日新聞」へ吸収され

いた。由美さんによると、河合は慶應三年伊予松山に生れ、生前は毎年旧藩主へ年始に参る慣わしであったといふ。来浜までの事情を詳らかにしないが、「明治ニユース事典」を捲っていると、次の記事が目に飛び込んだ。明治四三年一二月二〇日付「大阪毎日新聞」の「社員海外新派遣」という見出し、近く派遣予定の三人のなかに「横浜支局主任(毎日電報勤務)河合清(青水)」がいた。河合の派遣目的は、「日本産業の大宗たる蚕糸輸入国としてのみならず、一般の商業において我と至親の関係ある米国に向かい、実業上の视察に任ぜんとするもの」。すなわち、河合一筆名を青水、「大毎」社横浜支局主任、毎日電報勤務一が、数ある社員の中から抜擢され、米国へ実業视察に赴くことになったとの記事である。

その後、大正七年七月、河合は横浜の生糸絹物業界雑誌『シルク』の発行

河合清

生糸絹物業界誌『シルク』の編集・発行者

28

河合清

るまで刊行された新聞である。支局開設の時期は不明だが、場所が果して住吉町五の七二とすれば、同時期ここは『横浜商況新報』の発行地であった。

両者の関係はさて置く。支局前の洋服の人物が、由美さんの義父、故河合清氏のことであった。

由美さんに拝れば、河合は慶應三年伊予松山に生れ、生前は毎年旧藩主へ年始に参る慣わしであったといふ。来浜までの事情を詳らかにしないが、「明治ニユース事典」を捲っていると、次の記事が目に飛び込んだ。明治四三年一二月二〇日付「大阪毎日新聞」の「社員海外新派遣」という見出し、近く派遣予定の三人のなかに「横浜支局主任(毎日電報勤務)河合清(青水)」がいた。河合の派遣目的は、「日本産業の大宗たる蚕糸輸入国としてのみならず、一般の商業において我と至親の関係ある米国に向かい、実業上の视察に任ぜんとするもの」。すなわち、河合一筆名を青水、「大毎」社横浜支局主任、毎日電報勤務一が、数ある社員の中から抜擢され、米国へ実業视察に赴くことになったとの記事である。

その後、大正七年七月、河合は横浜の生糸絹物業界雑誌『シルク』の発行

兼編集者として登場する。発行所は、青木町一九六四番地(のち神奈川区松ヶ丘七八番地)の志留久社であった。河合は、第三号の社説で本誌の使命を本誌『シルク』は生糸、織物を打って一丸となし、又之に関連する各製品及蚕桑、縫糸に就き學術上、技術上の研究事項を網羅し、進んで間接に交渉を有する経済、財政その外社会的事物をも包含せしめ、主觀に客觀に、縦横無碍に、而も偏せず党せず、最も公正なる評論報道を任として産まれ(下略)。

と述べた。紙面構成は、巻頭社説のほか、政財界人や蚕糸試験研究機関などを含む時局や経済の観測、論文の寄稿を積極的に求め、国内外の生糸絹業に関する動向調査、市場予想、商況・統計を網羅した。B5判大、各号約455頁の本誌は、副題に「生糸及絹物界之權威」と云うに相応しい絹業界の専門月刊誌であった。志留久社では、また「特別調査部」を設け、絹業界に関する一般からの調査依頼に応じていた。この写真は、同じく由美さんの寄贈。昭和三年二月二日正午、新装のホテルニューグランド二階小食堂にて、志留久社主催第四回座談会での一コマ。原

河合の派遺目的は、「日本産業の大

業の大半を青水、「大毎」社横浜支局主任、毎日電報勤務一が、数ある社員

の中から抜擢され、米国へ実業视察に

赴くことになったとの記事である。

その後、大正七年七月、河合は横浜

の生糸絹物業界雑誌『シルク』の発行

報面から支え、リードしてきた斯界の

刊された。

(佐藤孝)

この間、河合は、「横浜生糸貿易復興録」(大正一五年)、「日本生糸要覽」(昭和二年)、「シルク年鑑」(同八年)を著した。昭和八年六月九日没。享年六六歳。墓地は鶴見の総持寺。なお

左から原富太郎、河合清、小野哲郎(小野商店)、芳賀権四郎(横浜生糸検査所長)、井坂孝(横浜商工会議所会頭、ホテル・ニューグランド社長)。

河合は、横浜市図書館等に大正七年(昭和二年)、「シルク」誌は、今日、創刊一〇周年の三年六月号に揮毫を寄せ、「議論怡も蚕の糸を吐くの如し」と書いている。

河合は、横浜経済界から信頼され確かな地位を築いていた。

その起点は、毎日電報横浜支局の時代

である。原富太郎は、「シルク」

と書いている。

「シルク」誌は、今日、

この間、河合は、「横浜生糸貿易復

興録」(大正一五年)、「日本生糸要覽」

(昭和二年)、「シルク年鑑」(同八年)

を著した。

昭和八年六月九日没。享年

六六歳。墓地は鶴見の総持寺。なお

井坂孝(横浜商工会議所会頭、ホ

テル・ニュ

ー・グラン

ド社長)。

『開港のひろば』総目次 （第一号～第三四号）

第一号	昭和五七年(丸)	三月三一日発行
第二号	昭和五七年(丸)	九月一日発行
第三号	昭和五八年(丸)	二月一日発行
第四号	昭和五八年(丸)	五月二〇日発行
第五号	昭和五八年(丸)	二月一日発行
第六号	昭和五九年(丸)	五月二〇日発行
第七号	昭和五九年(丸)	二月一日発行
第八号	昭和五九年(丸)	八月一日発行
第九号	昭和五九年(丸)	一月一日発行
第一〇号	昭和六〇年(丸)	二月一日発行
第一一号	昭和六〇年(丸)	五月一日発行
第一二号	昭和六〇年(丸)	八月一日発行
第一三号	昭和六〇年(丸)	一月一日発行
第一四号	昭和六一年(丸)	二月一日発行
第一五号	昭和六一年(丸)	五月一日発行
第一六号	昭和六一年(丸)	八月一日発行
第一七号	昭和六一年(丸)	一月一日発行
第一八号	昭和六二年(丸)	二月一日発行
第一九号	昭和六二年(丸)	五月一日発行
第二〇号	昭和六二年(丸)	八月一日発行
第一二号	昭和六三年(丸)	二月一日発行
第一三号	昭和六三年(丸)	五月一日発行
第一四号	昭和六三年(丸)	八月一日発行
第一五号	昭和六三年(丸)	二月一日発行
第一六号	平成元年(丸)	三月一日発行
第一七号	平成元年(丸)	五月一日発行
第一八号	平成元年(丸)	八月一日発行
第一九号	平成元年(丸)	九月一日発行
第二〇号	平成二年(丸)	五月一日発行
第一二号	平成二年(丸)	八月一日発行
第一三号	平成二年(丸)	三月一日発行
第一四号	平成二年(丸)	五月一日発行
第一五号	平成二年(丸)	八月一日発行
第一六号	平成二年(丸)	九月一日発行
第一七号	平成二年(丸)	五月一日発行
第一八号	平成二年(丸)	八月一日発行
第一九号	平成二年(丸)	九月一日発行
第二〇号	平成二年(丸)	五月一日発行

内容ぐんと充実「ブルーム十ドン・ブラウン」	第一号
コレクション	第一号
フランス週刊紙『イリュストラシオン』に	第一号
明治八年作成六郷川鉄橋架替工事設計図	第一号
ヘボン自筆の手紙など	第一号
民衆の生活を彩る地方文書	第一号
写真に残る明治の横浜・神戸	第一号
開港場の「陰」と無頼	第一号
ペリー来航と絵巻物	第一号
ホーリー船長は一番船か	第一号
横浜と新聞	第一号
ジエラールの瓦と煉瓦	第一号
横浜絵葉書—よみがえる震災前の横浜風景	第一号
アーネスト・サトウの文書と著作	第一号
黒船絵巻と瓦版	第一号
幕末の生麦村の「商人」たち『関口日記』から	第一号
五雲亭貞秀の横浜浮世絵	第一号
『岩倉使節団の米欧回覧』展	第一号
F・ベアトの幕末日本写真帳	第一号
道写真帳	第一号
『公文雜纂』「横浜市会解散之件」	第一号
『横浜最初の新聞』ショイイヤーのサー・キュー	第一号
木村摶津守(芥舟)資料の寄託	第一号
フランス人の描いた幕末・明治の日本一絵	第一号
入り新聞から	第一号
公家と市域の農民	第一号

第三二号	平成二年(丸)	一月一日発行
第三三号	平成三年(丸)	二月六日発行
第三四号	平成三年(丸)	六月一日発行
第三二号	横浜閑内	未完の建築四題
第三三号	横浜最初の芝居小屋下田座の開場	安政六年十月月中旬
第三四号	横浜貿易日報の発見	第三三号
第三二号	玉桶の記	第三四号
第三三号	横浜の神奈川湊	第三二号
第三四号	生糸商標のはじまり	第三二号
第三五号	横浜で製作された明治時代の着色写真	第三二号
第三六号	幕末期の神奈川湊	第三二号
第三七号	横浜閑内	未完の建築四題
第三八号	条約調印を見つめた黒船壁掛け	第三二号
第三九号	横浜の神奈川湊	第三二号

◎ 座談

館長対談 奈良本辰也氏を迎えて	第二号
館長対談 内田四方藏氏を迎えて	第三号
館長対談 野澤日出夫氏をゲストに	第四号
館長対談 宮本政幸氏・長沢和子氏を迎えて	第五号
館長対談 樋口次郎氏をゲストに	第六号
館長対談 萩原延寿氏を囲んで	第七号
館長対談 友野宏弥氏・山口辰男氏をゲストに	第八号
石井寛治氏をゲストに	第九号
近盛晴嘉氏を迎えて	第一〇号
早稲田稔氏を迎えて	第一一号
リナ・デンチシさんを迎えて	一二号
武田澄江さん・林静枝さん御姉妹	一二号
を迎えて	一三号
黒船館・吉田直太氏を迎えて	一四号
『関口日記』を語る内田四方藏氏	一五号
・森芳枝さんを迎えて	一六号
館長対談 スティールさんを迎えて	一七号
田中彰先生に聞く『岩倉使節団の米欧回覧』	一八号
展に寄せて	一七号
小沢健志先生に聞く『写真家ベアトと幕末の日本』	一八号
の日本』展に寄せて	一八号
加藤祐三先生に聞く『横浜にあった西洋	一八号

- 幕末の外国人居留地—』展に寄せて 第一九号
 御厨貴氏に聞く『明治の土木と政治』 第二〇号
 宮地正人先生に聞く『横浜の明治二〇年代』 第二一号
 『横浜もののはじめ』展に寄せて 第二二号
 木村昌之氏を迎えて 第二三号
 木村芥舟とその資料について 第二三号
 馬渕明子氏に聞く『フランス人の描いた幕末・明治の日本』 第二四号
 座談会『幕末の農民群像』展に寄せて 第二五号
 (大口勇次郎先生・鈴木ゆり子さんに聞く) 第二五号
 竹川御夫妻に聞く竹川竹斎と射和文庫について 第二六号
 横浜・中国の居留地建築と都市形成 (藤森照信氏・張復合氏に聞く) 第二七号
 今井清一先生に聞く『波乱の半世紀』展に寄せて 第二八号
 初期写真と絵画の交流 (酒井忠康氏に聞く) 第二九号
 座談『江戸湾の歴史』展に寄せて 第二九号
 (下村治久氏・福島金治氏に聞く) 第三〇号
 座談『商標による生糸の歴史』展に寄せて 第三一号
 (上山和雄氏・平野正裕氏に聞く) 第三一号
 座談『横浜の芝居』展に寄せて 第三二号
 (倉田喜弘氏・古井戸秀夫氏に聞く) 第三二号
 座談『横浜の新聞・雑誌』展に寄せて 第三三号
 (新井勝絃氏・福井淳氏に聞く) 第三三号
 座談 地域博物館のありかたをめぐって 第三四号
 (横田洋一氏・土井浩氏・平野実氏に聞く) 第三四号

◎ 展示余話

- 『日本の赤煉瓦』展余話 山手の異人館遺跡 第一二号
 『ペドラー・コレクション』絵葉書にみる震災前の横浜風景 第一三号
 『幕末のイギリス外交官』 第一四号
 トウ』展余話 第一四号
 『黒船絵巻と瓦版』展余話 黒船絵巻編者

◎ 資料よもやまばなし

- サトウ旧邸の「フィーニックス」誌 第七号
 一枚の写真から—明治初期・横浜の水事情 第八号
 ある没落士族の手紙—幕臣酒依昌長の一生 第九号
 幕府人事と横浜開港 第一〇号
 小笠原貢藏と蚕社の獄 第一一号
 明治四年の蚕種輸出 第二号
 幕末から明治初年の横浜の町と住民—残された手紙から 第三号
 フランスの新聞が得た幕末日本の情報 第四号
 ジョセフ・ヒコの国体草案をめぐって 第五号
 ウォルシュ・ホール商会

◎ 横浜新風土記稿

- 1 本牧本郷村 たまくす 第四号
 2 町屋村—江戸湾内の物資流通によせて— たまくす 第五号
 3 薪の流通と江戸・横浜 第三号
 4 市域の米穀市場と米の消費 第四号
 5 東京湾沿岸地域の湊と船 第五号
 6 横浜村の造船所 (縫装場) 第六号
 7 横浜の牧場 第七号
 8 幕末期の横浜市街地と住民 第八号
 9 谷頭種の豚と鎌倉ハム 第九号

堀口貞明—その後の調査から 第一五号
 『名主日記が語る幕末』展余話 生麦村の商業者 第一六号
 『岩倉使節団の米欧回覧』展余話 十八枚 第一八号
 の肖像写真 第一八号
 『写真家ベアトと幕末の日本』展余話 R・H・ブラントン旧蔵の写真帳 第一九号
 『横浜にあつた西洋—幕末の外国人居留地』 第二〇号
 展余話 松平春嶽偽上書の顛末 第二〇号
 市制施行と横浜の人びと』展余話 「記念写真二題」 第二三号
 『横浜もののはじめ』展余話 ロジャースの回顧談 第二三号
 『サムライ太平洋を渡る』展余話 地方名 第二四号
 主の世界一周 第二四号
 『フランス人の描いた幕末・明治の日本』展余話 海軍士官の残したスケッチ 第二五号
 『幕末の農民群像』展余話 萩原連之助の記録 第二六号
 『日本の開国と海外情報』展余話 『香港船頭貨価紙』 第二七号
 『関東大震災前横浜博覧図』展余話 第二八号
 『波乱の半世紀』展余話 横浜占領と回覧板 第二九号

原敬と幕末の仏国使節回想録 第一七号
 月刊ボックス・オブ・キュリオス 第二〇号
 ウォルシュ・ホール商会の番頭 松屋伊助と文書 第二一号
 二冊の和本をめぐる話—佐久間亮一家旧蔵 和本のうちから 第二三号
 『ジャパン・ヘラルド』・『ジャパンエクスプレス』両紙の生麦事件報道について 第二十四号
 横浜外国人埋葬地一件—山手外人墓地成立 小史 第二十五号
 沖守固の横浜三大事業—明治二〇年前後のまちづくり 第二六号
 共同倉庫と小野光景—明治十年代の倉庫事業 第二七号
 旗本と「豪農」—横浜情報をめぐって 第二九号
 写真史の源流をたずねて 第三〇号
 ロッシュのおばの嘆願書 第三一号
 伊勢佐木町通りの劇場街 第三二号
 三代目沢村田之助の写真 第三三号
 フランス陸軍士官、カミューの葬儀 第三四号

1	10	11	12	13	横浜市域の製糸工場	第三〇号
2	16	17	18	19	横浜の養蚕製糸業	第三一号
3	20	21	J・I・C・バレ	『横浜の製糸工場「続」』	第三二号	
4	22	紙の日本特派員	横浜発行の新聞「明治一〇年以降の変遷	第三三号		
5	南・部・弥・八・郎・の・謎	をおつて」	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号		
6	生・糸・と・軍・艦・	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三三号			
7	樺・山・舎・人・(久・舒)	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
8	斎・藤・久・慎	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
9	原・善・三・郎	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
10	佐・久・間・權・藏	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
11	南・部・弥・八・郎・の・謎	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
12	生・糸・と・軍・艦・	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
13	J・I・C・バレ	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
14	紙の日本特派員	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
15	震災後の渡辺文七—大正十三年の衆議院	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
16	議員選挙をめぐって—	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
17	J・I・C・バレ	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
18	紙の日本特派員	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
19	震災後の渡辺文七—大正十三年の衆議院	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
20	議員選挙をめぐって—	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
21	J・I・C・バレ	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			
22	震災後の渡辺文七—大正十三年の衆議院	本牧の「小野公園」—小野光景別荘	第三四号			

◎ 横浜人物小誌

1	23	原善三郎(続)横浜市非選出の横浜代議士第二九号
2	24	加山道之助 横浜市史編纂主任 第三〇号
3	25	二代目 中居屋重兵衛 謎の生糸売込商 第三一号
4	26	馮自由 横浜生まれの革命家 第三二号
5	27	小野兵助 幕末・明治の横浜町名主 第三三号
6	28	河合清 生糸絹物業界誌『シルク』の編集・発行者 第三四号
7	29	『幕末のイギリス外交官 アーネスト・サトウ』展 第三三号
8	30	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第四号
9	31	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第四号
10	32	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第四号
11	33	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
12	34	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
13	35	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
14	36	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
15	37	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
16	38	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
17	39	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
18	40	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
19	41	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
20	42	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
21	43	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
22	44	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号

◎ 閲覧室から

1	23	『ジョセフ彦と横浜の新聞』展 第一〇号
2	24	『日本の赤煉瓦』展 第一号
3	25	『ペドラー・コレクション 絵葉書にみる震災前の横浜風景』展 第一二号
4	26	『幕末のイギリス外交官 アーネスト・サトウ』展 第三三号
5	27	横浜開港資料館『黒船絵巻と幕末版』特集 第四号
6	28	『名主日記が語る幕末』展 第一五号
7	29	『F・ベアト・幕末日本写真集』 第一八号
8	30	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
9	31	特集『横浜にあった西洋・幕末の外国人居留地』 第一九号
10	32	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
11	33	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
12	34	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
13	35	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
14	36	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
15	37	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
16	38	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
17	39	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
18	40	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
19	41	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
20	42	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
21	43	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号
22	44	横浜開港資料館普及誌『たまくす』第五号

◎ その他の

1	23	「第一回横浜どんたく」開催 第一〇号
2	24	開館一周年記念講演会をふり返って 第二号
3	25	区史(その二) 第二八号
4	26	区史(その三) 第二九号
5	27	風刺雑誌 第三〇号
6	28	明治初期創刊の洋雑誌 第三一号
7	29	郷土史研究団体の会報 第三二号
8	30	明治期創刊の日本語雑誌 第三三号
9	31	横浜の写真集 第三四号
10	32	『第一回横浜どんたく』開催 第二六号
11	33	開館一周年記念講演会をふり返って 第二号
12	34	区史(その二) 第二八号
13	35	区史(その三) 第二九号
14	36	風刺雑誌 第三〇号
15	37	明治初期創刊の洋雑誌 第三一号
16	38	郷土史研究団体の会報 第三二号
17	39	明治期創刊の日本語雑誌 第三三号
18	40	横浜の写真集 第三四号
19	41	『第一回横浜どんたく』開催 第二六号
20	42	開館一周年記念講演会をふり返って 第二号
21	43	区史(その二) 第二八号
22	44	区史(その三) 第二九号

1	23	『ジョルジュ・ビゴー』展 第一〇号
2	24	『ブルームコレクション』展 第二号
3	25	『生糸貿易の幕開け』展 第三号
4	26	『ヘボンと横浜』展 第四号
5	27	『日本人と地図』展から 第五号
6	28	『開化の横浜・神戸』展から 第六号
7	29	『開港期・横浜の町と村』展 第七号
8	30	『ビルと文明開化の横浜』展 第八号

1	23	『ジョルジ・ビゴー』展 第一〇号
2	24	『ブルームコレクション』展 第二号
3	25	『生糸貿易の幕開け』展 第三号
4	26	『ヘボンと横浜』展 第四号
5	27	『日本人と地図』展から 第五号
6	28	『開化の横浜・神戸』展から 第六号
7	29	『開港期・横浜の町と村』展 第七号
8	30	『ビルと文明開化の横浜』展 第八号

☆印上映時間三〇分。その他は、すべて一五分。
VHSビデオ版があります。※印は除く

アメリカの資料調査 第二一号
上海市学術交流代表団の訪問 第三三号
☆ツクナンバーは、当館閲覧室でご覧になれます。
また、残部のあるものについては、当館受付もしく
は、郵送にてお頒けいたします。 (送料別途)

横浜開港資料館普及映画一覧 (平成三年四月現在)
☆横浜開港資料館 昭和五六
☆絹のみちー上州から横浜 昭和五七
☆港都横浜・神戸 昭和五八
横浜の赤レンガ 昭和五九
黒船渡来と瓦版 昭和五九
知られざる史跡めぐり 山手・根岸編 昭和六〇
横浜浮世絵 昭和六〇
横浜のあゆみ 開港から震災まで 昭和六一
知られざる史跡めぐり 関内編 昭和六一
知られざる史跡めぐり 西区編 昭和六二
横浜もののはじめ 昭和六二
横浜歴史散歩 金沢をめぐる 昭和六三
ヨコハマのれきしー黒船から関東大震災まで 昭和六三
横浜歴史散歩 幕末の写真家F・ベアトとともに 平成一
波乱の半世紀ー横浜市の誕生から戦後復興まで 平成一
横浜の芝居ー明治大正期の庶民文化 平成二
名主日記が語る幕末 平成二

中山裕史 第二二号
アメリカの資料調査 第三三号
上海市学術交流代表団の訪問 第三三号
☆ツクナンバーは、当館閲覧室でご覧になれます。
また、残部のあるものについては、当館受付もしく
は、郵送にてお頒けいたします。 (送料別途)

書名(発行年月)	販売価格
ペリー来航関係資料図録(巻・三)	1000円
ブルーム・コレクション書籍目録	1000円
第一卷 英文書籍 著者A・J・L(巻・三)	750円
第二卷 英文書籍 著者M・Z、仏文	600円
第三卷 各国語書籍、和漢書(堯・三)	1000円
第四卷 逐次刊行物、著者・書名索引(六・三)	600円
たまくす	
1号 横浜開港資料館総合案内(堀・三)	1500円
2号 特集 開化の横浜・神戸(堀・三)	400円
3号 特集 横浜開港名所図会(堀・三)	700円
4号 特集 黒船絵巻と瓦版(堀・三)	500円
5号 特集 外国人居留地(堀・三)	500円
5号以降休刊	
『横浜毎日新聞』が語る明治の横浜	
第一集 明治三~五年(堀・三)	1000円
第二集 明治六年(六・三)	1000円
第三集 明治七年(六・三)	1000円
第三集以降休刊	
『名主日記』が語る幕末(六・三)	600円
『イリュストラシオン』日本関係記事集	
第一巻 一八四三~八〇年(六・三)	2500円
第二巻 一八八一~一九〇三年(六・三)	2500円
第三巻 一九〇四~〇五年(六・三)	2800円
こども講座『横浜のあゆみ』(六・三)	700円
F・ベアト幕末日本写真集(六・三)	2000円
H・S・パーマー展示図録(六・三)	600円
横浜水道関係資料集(六・七)	600円
堤磯右衛門 幕末維新『懷中覚』(六・二)	1000円
市制施行と横浜の人びと(六・二)	1000円
横浜もののはじめ考(六・三)	2000円
木村芥舟とその資料(六・三)	1000円

『ル・モンド・イリュストレ』日本関係 さし絵集(六・六)	1000円
吉村屋幸兵衛関係書簡 復刻版(一・三)	1500円
波乱の半世紀(三・二)	1200円
江戸湾の歴史(三・四)	1200円
横浜町会所日記(三・三)	1700円
資料が語る横浜の百年(三・五)	1200円
上記出版物については、料金後払いにて郵送販売 (送料別途)を受け付けています。	

複製資料・来館記念品

横浜歴史イロハカルタ	800円
ジグソーパズル(横浜錦絵)	800円
絵はがき 各5枚組	500円
(復刻版着色絵はがき 1)	250円
(復刻版着色絵はがき 2)	250円
かわら版	
(御浜御殿御固め図)	
(アメリカ蒸気船之図)	
額絵(ペリー提督横浜上陸の図)	
横浜実測図(一八六五年クリペ作成)	
絵皿(北亞墨利加蒸気船之図)	
横浜絵(横浜休日亞墨利加人遊行)	
樂譜(トミー・ボルカ)	
横浜細見大双六(貞秀画)	
新聞(絵入ロンドン新聞)(六・五、七)	
ビデオ(横浜歴史散歩 F・ベアトとともに)	3500円

横浜開港資料館では、このほかに非売品として、紀要、史料所在目録等を発行しています。
当館閲覧室、主要図書館等で御利用下さい。

閲覧室から

利用の多い資料の一つに写真集があります。今回は、横浜で撮影された写真を多く収めた写真集を、とり上げてみたいと思います。



○「神奈川の写真集」

(金井圓、石井光太郎編 有隣堂 昭和四五年四月～昭和四六年一二月 B)

年間の横浜の歴史に新たな光をあてる。
 (2) 「R・H・プラントンと横浜の街づくり」(仮題) 10／10～1／26
 市民のくらしや街の様子、世相、風

(3) 『維新时期の英仏駐屯軍と横浜』(仮題) 1／29～4／26

11／16から12／14の毎週土曜 全五回
 講師等詳細未定

(3) 『英仏駐屯軍と横浜』展開催記念講座 展示のもととなる資料を素材として、幕末期、攘夷の激化により駐屯した外国軍隊の実態、開港場や政府との関係などを明らかにする。2／29から3／28の毎週土曜 全五回 講師等詳細未定

合由美氏)

(1) 『資料が語る横浜の百年—幕末から昭和初期まで』(同名展示の図録)
 一〇〇円

以上の方は閲覧室開架書架にあります。(上田由美)

閲覧室休室のおしらせ

本号は開館一〇周年記念として、これまでの「開港のひろば」総目次と、出版目録等を付録として、掲載いたしました。広く御利用いただければ幸いです。(係)

(1) 開館一〇周年記念館蔵貴重資料展
 「資料が語る横浜の百年」 6／1～10／6
 開館以来の十年間に収集した
 り、寄贈・寄託を受けた資料の中から
 特に貴重なものを選んで紹介する。そ
 れらによって、開港期を中心とする百

行事開催予定(平成三年度)

▼展示

(1) 開館一〇周年記念館蔵貴重資料展
 「資料が語る横浜の百年」 6／1～10／6
 開館以来の十年間に収集した
 り、寄贈・寄託を受けた資料の中から
 特に貴重なものを選んで紹介する。そ

▼講座

(1) 資料講読講座 「条約改正とH・S・

▼寄贈資料

(1) 昭和五〇年代横浜航空写真 五七点
 (2) 横浜歴史講座 「古文書が語る神奈川の歴史」 県内各地に残された古文書を素材として、街道・湊・河川等を軸に、一定のテーマを設けて解説する。

▼出版物

(1) 平成三年6月25日(火)～28日(金)
 (2) 平成四年1月28日(火)～31日(金)

図書整理のため、次により閲覧室を休みます。

二 情報

(1) 昭和五〇年代横浜航空写真 五七点
 (2) 毎日電報社横浜支局等河合清氏関係 写真見本 一点(神奈川区松ヶ丘 河

5判 五冊)

「明治前期」編(明治初年から明治一〇年前後)、「明治中期」編(明治一年から明治三九年まで)、「明治後期」編(明治三九年より明治四五年まで)、「大正」編(大正元年より大正一二年まで)、別巻として「関東大震災」編の五冊に分かれており、それぞれ神奈

川県に関する写真をいくつかの地域に分けて収録している。別巻以外には、各巻末に年表を付す。

○「横浜思い出のアルバム」(横浜市市民局市民活動部広報課広報センター編 横浜市制九〇周年・開港一二〇周年記念行事実行委員会 昭和五四年六月 A4判 一六〇頁)

料普及協会編・発行 昭和六二年二月 B5判 一九九頁)

「横浜・神奈川県の風景」、「日本各地の風景」、「人びとの暮らし」の三枚のうち、七二八点を収録したもの。

当館が所蔵する彩色写真約三〇〇〇枚から収録したもの。巻末に解説「横浜写真小史」F・ベアトと下岡蓮杖を中心にして、「」をのせる。

○「色彩アルバム」明治の日本 ▲横浜写真▽の世界」(上田由美)

以上の刊本は閲覧室開架書架にあります。

横浜開港資料館、(財)横浜開港資料普及協会編 有隣堂 平成二年三月 A4判 二四七頁)

当館が所蔵する彩色写真約三〇〇〇枚のうち、七二八点を収録したもの。「横浜・神奈川県の風景」、「日本各地の風景」、「人びとの暮らし」の三枚で構成され、全てカラーである。当時の高度な彩色技術によって、風景や人びとの暮らしが鮮明に甦る。巻末に解説として「横浜写真家一覧」、「横浜の写真家一覧」、「推定撮影者一覧」をのせる。